

教職を目指す学生の教育への関心と意欲を高める実践

高畑 尚弘（愛知大学 非常勤教員）

序 愛知大学の教職課程の科目「生徒・進路指導の理論と方法」を担当するにあたり、40年間高校の教員を務めてきた経験をもとに、受講生に教育現場での具体的事例を可能な限り紹介するとともに、その事例に対する筆者なりの考え方等を示している。併せて教職のやりがいを伝え、教育者としての自覚と使命を体得できるように心がけている。そのことで教職を目指す受講者の多くが、次代を担う児童生徒の成長に関わる大切な役割をもつ、有用な教員に育っていくことを願っている。

1 はじめに

全国的に公立学校教員選考採用試験の受験者数が年々減少し、令和4年度採用の全体の競争率（採用倍率）は3.7倍、受験者総数は、126,391人で、前年度と比較して7,876人減少した（文部科学省）。⁽¹⁾ 令和5年度の採用選考試験についても同様な傾向が見られ、全体の競争率は低下しているとの報道があった。この状況は憂慮すべきことであり、長時間労働等いくつかの要因が挙げられている。教職課程の科目を選択している学生は、教職に就くことを目指しており、教育に関する関心や意欲が高いと感じる。勤務状況改善等の取組が進んでいるようだが、これら負の要因に囚われ、学生が教職への道を自ら閉ざすことがないよう願いたい。

今回、学生の教育への関心と意欲を高める

実践の一つを紹介する。毎回、授業の後半10分程度を活用し、授業で取り上げた事項についての課題を提示し、意見を書かせた。課題はできるだけ具体的な事例をもとに設定し、学生にはこれまでの自身の経験をもとに、教師の視点で回答するよう求めた。全15回の授業において課題に回答することで、将来教壇に立ったときの心構えができるよう配慮した。

ここでは、「自己肯定感を教育活動の中でどのように育んでいくのか」を課題とした内容を紹介する。「自己肯定感を育むこと」については、生徒指導提要（令和4年12月 文部科学省）に生徒指導の実践上の視点の一つとして記載されている。

2 実践内容

次の（1）～（6）の順で取り組んだ。（1）自己肯定感に関する内容を含む授業の展開、（2）日本人の自己肯定感についての資料を題材とした課題の提示、（3）課題の回答の集約と回答内容の配付、（4）グループワークによる意見交換と意見交換をした内容の発表、（5）筆者による学生への問いかけ等、（6）教師の視点を踏まえた上での自身の考えをまとめること、とした。

（1）授業の展開

第1回の授業（内容は「生徒指導と進路指導の概要」）では、教育者の使命と自覚につ

いて筆者が教員を務めてきて思うこと、感じるなど、次代を担う生徒たちに伝えたいことを述べた。

第2回の授業（内容は「生徒指導の意義と原理」）では、生徒指導提要（令和4年12月文部科学省）に基づき、生徒指導の定義と目的について説明した。

生徒指導提要では定義と目的に続き「1. 1. 2 生徒指導の実践上の視点」の「(1) 自己存在感の感受」には「…そのため、集団に個が埋没してしまう危険性があります。そうならないようにするには、学校生活のあらゆる場面で、『自分も一人の人間として大切にされている』という自己存在感を、児童生徒が実感することが大切です。また、ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感や、他者のために役立った、認められたという自己有用感を育むことも極めて重要です。」と記載（一部抜粋）⁽²⁾ されていることを示した。

学生には、生徒指導において自己肯定感や自己有用感を育むことが重要であることを認識させ、教育課題として取り組むべきことの一つであると説明した。

(2) 課題の提示

日本人の自己肯定感が外国に比べ低いとされる要因等についてどのように考えるか、を書かせた。

ア 使用した資料

「平成26年版 子ども・若者白書（内閣府）」の中の「特集 今を生きる若者の意識～国際比較から見えてくるもの」を資料（一部抜粋）とした。⁽³⁾

イ 学生に提示した課題

○ 日本人の自己肯定感について

日本の若者は諸外国と比べて、自己を肯定的に捉えている者の割合が低く、自分に誇りを持っている者の割合も低い。日本の若者のうち、自分自身に満足している者の割合は5割弱、自分には長所があると思っている者の割合は7割弱で、いずれも諸外国と比べて日本が最も低い。年齢階級別にみると、特に10代後半から20代前半にかけて、諸外国との差が大きい。（図表 1、2）

〔出典：平成26年版子ども・若者白書（内閣府）〕

課題：日本人の自己肯定感について

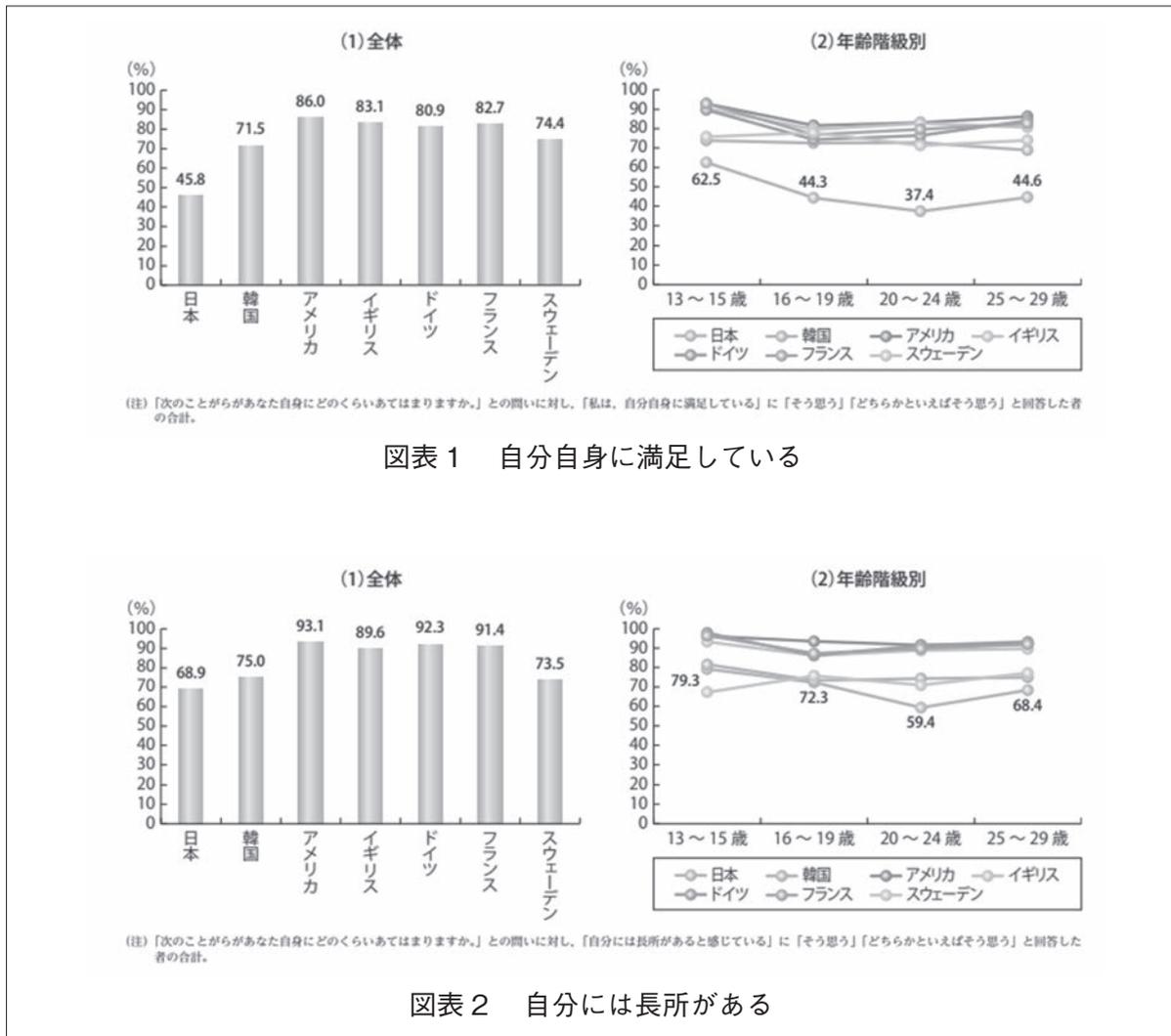
- ① どうして諸外国に比べて日本人の自己肯定感は低いと思うか。
- ② どのようにしたら自己肯定感が高まると考えるか。

(3) 学生の回答

課題の回答について、その内容から「日本人の特性」「比べる」「学校教育」の3つに分けた。次のア～ウはその主な回答である。なお、①は「どうして諸外国に比べて日本人の自己肯定感は低いと思うか。」②は「どのようにしたら自己肯定感が高まると考えるか。」で、各学生の回答を①、②の連続で記載した。また、学生たちの思いを尊重するためなるべく書かれたものに近い形で記載した。（*下線は筆者による）

ア 日本人の特性

- ① 日本人は控えめで感情表現が得意ではない。そのため、他人から「あなたは○



○が良いね。」と、良い所はここだ、と伝えられる機会が少なく、自分の魅力に気づかない。

- ② 小さい頃から相手に良い所を伝える、伝えられる環境を作ったり、短所は裏返すと長所になる（優柔不断→様々なことを考えられる）ことを学ぶ機会を作ったりするとよい。

- ① 「出る杭は打たれる」「謙遜こそは美德」という精神が昔から根付いている。根本的に内向的な性格。無意識に「他人の方が自分より優れている」と考えるように

なり、自分に自信が持てなくなる。

日本人は諸外国に比べて内気でシャイであるため、うまくいかなかったりすると「自分はだめだ」と思ってその気持ちがずっと続く。

- ② 私は自己肯定感が0を下回ったり、たまに10万くらいになったりするのですが、自己肯定感が10万の時の気持ちは、育った家庭や考え方が違う人たちと自分を比べたって意味ないし、自分が主人公だから好きに生きようって感じです。自己肯定感が低い人は、自分と周りを比べ

てしまっているのだと思います。(原文ママ)

- ① 犯罪心理学者の出口保行氏は著書「犯罪心理学者が教える子どもを呪う言葉・救う言葉」のなかで「日本人の自己肯定感の低さは謙遜の文化からきている」と論じている。氏によれば親が他の家庭の保護者などと話す際、自分の子どもをへりくだることで円滑なコミュニケーションを図ることができる反面、子どもの自己肯定感が下がる。
- ② 長所を褒める。ただし、度を超えるとよくない。

イ 比べる

- ① 日本人は同調圧力が外国に比べてとても強いと感じることが多い。例えばマスク。とにかく、人と比べる、他人はどうしているのかなと考えてしまう。
- ② 他人と比べず、自分自身と比べる、自分はどうかという、自分中心とした考えに改めることが必要。
- ① 小さい頃から周りと比べてどうか、ということに目を向けられる傾向が日本は強いと考える。一人だけ違うことをしていると先生が「周りを見なさい。みんな何をしていますか？」など周りと比べてあなたはどうか？という指導が多いと考えられる。
- ② 注意するときも周りと比べるのではなく、本人と向き合った考え方を幼い頃からすることで、そもそも人と比べる考えが減り、自己肯定感や自分の存在価値が高まると考える。

① 他人と比較したり、競争させたり、順位をつけるような教育が定着しているからだ¹と考える。テスト…など。知らず知らずのうちに自分と誰かと比較するようになり、当人同士、相互に優劣の感情・意識が生まれる。

② 「ほめる」ことが大切。小さい頃はいっぱい褒めてほしいし、見ていてほしい。小さい頃の経験や言われた言葉は忘れてしまうようでも心の中に残るものだと思う。

① SNSが普及したこと。SNSのインフルエンサーの容姿や能力、暮らしぶりなどと自分のそれと比較してしまう。自分自身の良さに気づこうとせず、他者と比較して自分の欠点を探してしまっている。

② 自分の良さに気づく場面を教育の場面でも設ける。

① 自分に対して求めるハードルを高く設定する傾向がある。例えばSNSで華やかな生活をしている部分が投稿されているのを見て、「私はこんな素敵な生活を送っていない」と感じて自身にマイナスな評価を下してしまうなど、自分に満足できずに他人に漠然と憧れを抱くことが多い。

② 世間の基準にとらわれず、自分が楽しいと思えることを見つけ出し、それを大切にする。

ウ 学校教育

① 日本の教育は「できること」を認識する教育ではなく、「できないこと、苦手なこと」を認識させて、それらに向き合わせるという教育を行っているため、日本の子どもの自己肯定感が上がらない。

- ② 学校において、一人一人の存在を認めてあげる（授業中の発言に対してのフォロー等）などの活動のほか、「できること」を認識させてそこから必要なことを考えさせるような指導の仕方が有効。
- ① 短所に目を向けるネガティブな考え方が主流になっている。自分の見方を変える必要がある。できない方に目を向ける考え方を直すべき。音楽などの芸術が得意な人が学力によって評価されてしまう体制は直すべきだと思う。
- ② 自分の見方や考え方を改めて客観的な自己評価を行うことで自己肯定感が高まると思う。また、成功体験を強く意識できるような教育が必要。
- ① 日本の教育には減点方式が採用されていること。他に「競争意識」「一定の水準に達しなければ否定される」ことなど。
- ② 減点方式を加点方式に変えていく。
- ① 日本の教育は「マイナス面を攻める教育」だと思う。入試などでも「できる教科」より「できない教科」に目を向けがち。それに比べて外国では「できることを伸ばす教育」であると思う。
- ② 「できる」に焦点を当てたほうがよい。日本ではできなければ極論、上から押さえつけるように教育をする。このようなことをなくすことが重要。また、「すべて同じでなければならない」という認識を改めるべき。
- ① 日本では良いところを伸ばすよりも、ダメなところ、足りていないところを伸ばす教育をしていると思う。数学が苦手な点が高い生徒がいたら、数学を勉強するように教育し、その生徒が得意な科目に対しては何も言わない。そのような教育をしているから自己肯定感が低いのでは。
- ② 良いところを褒め、伸ばす教育をすることが大切。
- ① 日本という国柄的に他者へ尽くす性格が強く、言われたことをやる受け身教育が主流であったから。
- ② 学校教育において、体験学習、演習系の学習など実際に経験できる学習を様々なジャンルで出来るようにする。（色々な事をさせることで自分が出来ることを理解し、自信を持たせられる）
- ① 学校教育における進路決定の仕方が挙げられる。ドイツでは中学校に入る頃から、大学に進学する人のクラス、大学には進まず専門的な分野を極める（職人になるなど）クラスとで分けられる。対して日本はとりあえず大学に入っておけば安泰だと思う人が多く、自分が何をしたいかよりも大学に入ることが目的になってしまっているように感じる。やりたいことが見つからない、何となく過ごしているのが若者の現状だと思う。それによりモチベーションが下がり、自己肯定感の低くなる原因では？
- ② もっと早い時期から進路教育を始める。
- ① 日本人は失敗を恐れているので積極的に動けず、自分に満足できずにいるので自己肯定感が低い。
- ② 幼い頃から積極的に物事に参加し、失敗しても何も問題ないと思わせるように

する。成功体験をたくさん経験させる。このような体験を、学校などを通じてできるとよい。

(4) グループワークによる意見交換

第3回の授業で、前記(3)の回答内容を印刷して配付するとともに、学生4~6名のグループをつくり、課題について意見交換の場を設定し、各グループで話し合った内容について発表させた。発表内容は前記(3)の回答内容に重なるものがほとんどであったが、意見交換の場では、自分の考えを言葉にして伝え、それに対する質疑応答ができたこと、また様々な意見をグループで共有できたことで充実感を得た、との発言もあった。

(5) 筆者による学生への問いかけ等

前記(3)の回答内容、(4)での発表内容を踏まえ、筆者が学生に次のような問いかけ等を行った。

ア 比べることは自己肯定感を下げることにつながるのだろうか？

人から比べられること、と、自分が他者と比べること、は違うのではないか。他者との違いを体感することで、自分の個性や持ち味が判ることに繋がるのではないか。そもそも集団で行われる学校教育の特徴がそこにあるのではないか。教員は、そのための支援をする役割を担っているのではないか。

イ 自己肯定感と伝統・文化の継承の関連について

仁平千香子は著書「故郷を忘れた日本人へ」の中で「…belonging(帰属していること)

とは、今いる場所に根を張っていると感じられる意識を意味する。文化に生きることは、帰属する場を持ち、時間の流れに根を張ることを意味し、その結果個人は自分が存在しているという確かな感覚(自己肯定感)を得る。」としている。⁽⁴⁾

教育基本法の第二条(教育の目標)第五項には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」とあり、改めて教育活動において、自国の伝統・文化に触れ、先人の足跡を学ぶことの大切さを伝えた。

(6) 教師の視点を踏まえた学生の考え

前記(2)~(5)を経て、次のアで示す問いに対する考えを書くことで、まとめとした。

ア 問い

グループワーク等を踏まえ、教師として児童生徒の自己肯定感や自己有用感を育むにはどのようなことを意識して教育活動をしているかと思うか、あなたの考え(思い)を書きなさい。

イ 問いに対する学生の主な回答

- ・ただ褒めるということだけではなく、どこがよいのか、どこが素晴らしいのかを伝えられるように褒めて自己肯定感や自己有用感を高められる教育をしたい。
- ・多様性と個性を尊重できる教育者になりたいと思った。「皆違って皆いい」のような教育をしたい。
- ・点数や順位だけに目を向けずに、児童生徒の個性や長所を伸ばす教育をする。生

きる上で「比べる」ことは当然あるが、劣っているからといってそれをつついたり叱ったり見下したら自己肯定感は下がってしまう。「比べる」ときは相手のことを尊重した上で行う。

- ・保護者会などで学校生活を頑張っていること、良かったことなど成績表や通知表に載らないことを伝えることが大切だと思う。
- ・教師として子供たちと接する際には意思を尊重し、短所に目を向け過ぎるのではなく、できたことをたくさん褒めることをしていこうと思う。
- ・学校という集団活動の場で、自分の立ち位置や持ち味が分かるような学級組織や学校行事をつくっていくことが大切であると考えている。
- ・順位付けなど自己肯定感を下げるのではないかといわれる活動でも、ポジティブに捉えれば「ライバルに勝つことができた」「他のクラスより順位が上がった」など自己肯定感を高める活動になり得ると思うので、そのことを踏まえつつ教育活動を行っていきたいと考える。
- ・人と違うことは悪いことでも恥ずかしいことでもなく、他者の良い所を見つけたらそれを認め、自分だったらどのようなことができるかを見つけられるような環境作りがしたい。
- ・一人一人の長所にあった役割をもたせる教育をしたい。例えば、人をまとめ導くことができる人は学級委員、絵を描くことが得意な人は学級文集や卒業文集の表

紙を描く人といったように、得意なことに役割を与えることで長所が伸び、また自分は必要とされているんだ、という自己有用感も伸び、自己肯定感に繋がると考えた。

- ・学校が決めた学力の基準や大人が考える、できて当たり前のことを基準に褒めるのではなく、子供一人一人の達成度にそって褒める。
- ・結果を比べるのではなく、子供の行動の過程を褒める。「テストの順位が上がったね」→「苦手だった記述の問題を頑張ったんだね」。テストの順位、点数が伸びていなくても褒めるポイントが増える。
- ・頑張れる、努力をすることができるということは誰にでもできることではなく、とてもすごいことである。成績だけでなく、それまでの頑張りや良い所を些細なことでも見つけ、たくさん褒めてあげたいと思う。そして良い所に目がいき、生徒が自分自身を認めることができるようになったら嬉しい。
- ・努力の証が見えているのなら把握し、感情を込めて児童生徒が一番認めてもらいたいであろう親の前で褒めてあげることが有効だと考える。
- ・教師が一人ひとりと向き合うためにも、生徒自身が個性を発掘するためにも、生徒同士が認め合う活動を定期的に設け、その結果をワークシートにまとめさせるようにする。それを教師がフォローを返す、という円環的なやりとりができれば、生徒の「認めてほしい」という思いに応

えてあげられるのでないか、と考える。

3 おわりに

春学期、秋学期の受講生は合わせて100名ほどになる。今回、20歳前後の教職を目指す学生の言葉を多く掲載した。学生個々人の意見は限られているが、回答を集約しフィードバックすること、グループワークで意見交換することで、より多くの意見に触れることができたと考える。

まとめとして書いた「教師の視点を踏まえた考え」の多くは、それぞれ教育活動の一場面を想定しながら、具体的で前向きな思いが記されていた。このような実践が、教職を目指す学生の教育への関心と意欲を高める一助になっていくと考える。

児童生徒を取り巻く環境が変化し、様々な

課題を抱える児童生徒が増える中、学校教育における役割は多様化するとともにその重要度は増している。学校現場では、教員間の情報交換や現職研修等を通じて、全体や個別の事案について真摯にそしてしなやかに対応している。この科目では、教育現場でみられる事例等をもとに今日的課題を取り上げ、受講者が問題意識をもち、考え、共有をすることで、教職につながる素養を高める時間としたい。

引用文献

- (1) 文部科学省「令和4年度（令和3年度実施）公立学校教員採用選考試験の実施状況について」
- (2) 文部科学省「生徒指導提要 令和4年12月」p14
- (3) 内閣府「平成26年版 子ども・若者白書」内の「特集 今を生きる若者の意識～国際比較から見えてくるもの」
- (4) 仁平千香子「故郷を忘れた日本人へ」啓文社書房 p34